調４１８－（２）－１

令和７年９月９日 地震調査研究推進本部 地震調査委員会

２０２５年８月の地震活動の評価（案）

１．主な地震活動

目立った活動はなかった。

２．各領域別の地震活動

（１）北海道地方

○　８月２日に釧路沖の深さ約15kmでマグニチュード(M)5.4の地震が発生した。この地震の発震機構は北西－南東方向に圧力軸を持つ型であった。

○　８月12日に釧路沖の深さ約20kmでM5.5の地震が発生した。この地震の発震機構は北北西－南南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、陸のプレート内で発生した地震である。この地震の震央周辺では、５月31日にM6.0の地震が発生し、地震活動が継続している。

○　８月19日に渡島地方東部の深さ約130kmでM5.1の地震が発生した。この地震の発震機構は太平洋プレートの沈み込む方向に圧力軸を持つ型で、太平洋プレート内部（二重地震面の上面）で発生した地震である。

（２）東北地方

○　８月22日に宮城県沖の深さ約45kmでM5.6の地震が発生した。この地震の発震機構は西北西－東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型であった。この地震の震央の南約30km付近では、８月30日に深さ約40kmでM5.8の地震が発生し、発震機構は東西方向に圧力軸を持つ逆断層型であった。これらの地震は太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した。

（３）関東・中部地方

○　８月14日に茨城県沖の深さ約45kmでM5.2の地震が発生した。この地震の発震機構は北西－南東方向に圧力軸を持つ型で、太平洋プレート内部で発生した地震である。

（４）近畿・中国・四国地方

目立った活動はなかった。

（５）九州・沖縄地方

○　８月７日に大分県西部のごく浅い場所でM4.8の地震が発生した。この地震の発震機構は南北方向に張力軸を持つ横ずれ断層型で、地殻内で発生した地震である。

○　８月７日に与那国島近海の深さ約110kmでM5.6の地震が発生した。この地震の発震機構は北東－南西方向に張力軸を持つ型で、フィリピン海プレート内部で発生した地震である。

○　８月17日に日向灘の深さ約30kmでM5.7の地震が発生した。この地震の発震

機構は西北西－東南東方向に張力軸を持つ型で、フィリピン海プレート内部で発生した地震である。

（６）南海トラフ周辺

○　南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていない。

注：ＧＮＳＳとは、ＧＰＳをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称である。

２０２５年８月の地震活動の評価についての補足説明

令和７年９月９日
地震調査委員会

１．主な地震活動について

2025年８月の日本及びその周辺域におけるマグニチュード（M）別の地震の発生状況は以下のとおり。

M4.0以上及びM5.0以上の地震の発生は、それぞれ91回（７月は166回）及び11回（７月は26回）であった。また、M6.0以上の地震の発生は０回（７月は０回）であった。

（参考）　M4.0以上の月回数81回（69-104回）
（1998-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲）
M5.0以上の月回数10回（７-14回）
（1973-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲）
M6.0以上の月回数１回（０－２回）
（1919-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲）
M6.0以上の年回数16回（12-21回）
（1919-2017年の年回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲）

2024年８月以降2025年７月末までの間、主な地震活動として評価文に取り上げたものは次のものがあった。

－	日向灘	2024年８月８日	M7.1（深さ約30km）
－	神奈川県西部	2024年８月９日	M5.3（深さ約15km）
－	茨城県北部	2024年８月19日	M5.1（深さ約10km）
－	鳥島近海	2024年９月24日	M5.8（深さ約10km）
－	石川県西方沖＊	2024年11月26日	M6.6（深さ約10km）
－	日向灘	2025年１月13日	M6.6（深さ約35km）
－	福島県会津	2025年１月23日	M5.2（深さ約５km）
－	長野県北部	2025年４月18日	M5.1（深さ約15km）
－	トカラ列島近海	2025年６月30日	M5.3
－	トカラ列島近海	2025年７月２日	M5.1
－	トカラ列島近海	2025年７月２日	M5.6
－	トカラ列島近海	2025年７月３日	M5.5（深さ約10km）
－	トカラ列島近海	2025年７月５日	M5.4
－	トカラ列島近海	2025年７月６日	M4.9
－	トカラ列島近海	2025年７月６日	M5.5
－	トカラ列島近海	2025年７月７日	M5.1
－	ロシア、カムチャツカ半島東方沖	2025年７月30日	M8.8

＊令和６年能登半島地震の地震活動

２．各領域別の地震活動

（１）北海道地方

北海道地方では特に補足する事項はない。

（２）東北地方

東北地方では特に補足する事項はない。

（３）関東・中部地方

－　石川県能登地方では、2020 年 12 月から地震活動が活発になっており、活動当初は比較的規模の小さな地震が継続する中、2023 年５月に M6.5、2024 年１月に M7.6、2024 年 11 月に M6.6 などの比較的規模の大きな地震も発生した。M7.6 の地震の活動域では、地震活動が低下してきているものの、８月中に震度１以上を観測した地震が 13 回発生するなど依然として継続している。

ＧＮＳＳ観測によると、M7.6 の地震の後、能登半島を中心に富山県や新潟県、長野県など広い範囲でおよそ 20 か月間に２cm を超える水平変動など、余効変動と考えられる地殻変動が依然として観測されている。

日本海側では昭和 58 年（1983 年）日本海中部地震（M7.7）などのように、最大規模の地震発生から数年程度経った後も、M6.0 程度の地震が発生した事例がある。また、能登半島の周辺では、今回の 2020 年 12 月からの一連の地震活動以前にも平成 19 年（2007 年）能登半島地震（M6.9）など、M6.0 程度以上の被害を伴う規模の大きな地震が発生している。

－　ＧＮＳＳ観測によると、2022 年初頭から、静岡県西部から愛知県東部にかけて、それまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されている。これは、渥美半島周辺から浜名湖にかけてのフィリピン海プレートと陸のプレートの境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。すべりの中心は渥美半島周辺から浜名湖周辺に移動している。

（４）近畿・中国・四国地方

－　ＧＮＳＳ観測によると、2019 年春頃から四国中部でそれまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されている。これは、四国中部周辺のフィリピン海プレートと陸のプレートの境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。この地殻変動は、最近は停滞している。

－　ＧＮＳＳ観測によると、2020 年初頭から、紀伊半島南部でそれまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されている。これは、紀伊半島南部周辺のフィリピン海プレートと陸のプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。この変動は 2024 年秋頃から一時的に停滞していたが、2025 年初頭から再び観測されている。

－　2025 年２月から山口県北部でまとまった微小地震活動が見られ、６月以降活動は低下していたが、８月に再度やや活発になった。また、これらの地震活動に伴って、ＧＮＳＳによってわずかな地殻変動が観測されている。

（５）九州・沖縄地方

－　ＧＮＳＳ観測によると、2025 年１月 13 日に日向灘で発生した M6.6 の地震の後、およそ７か月間に宮崎観測点で南東方向に約３cm の水平変動など、余効変動と考えられる地殻変動が観測されている。

－　６月 21 日からトカラ列島近海（小宝島付近）で地震活動が活発となり、７月３日には M5.5 の地震（最大震度６弱）が発生するなど、７月７日までの間に最大震度５弱以上を観測した地震が８回発生した。８月中に発生した最大規模の地震は９日に発生した M4.4 の地震（最大震度３）である。これらの地震活動は陸のプレート内で

発生した。
　ＧＮＳＳ観測の結果によると、今回の一連の地震活動に伴い宝島や小宝島、悪石島で水平変動が観測されていたが、８月以降は停滞しているように見える。
　今回の地震活動は、７月 20 日頃から低下してきており、規模が大きな地震の回数も減少しているが、８月中に震度１以上を観測する地震が 66 回発生するなど、現状程度の地震活動（震度１以上の地震が１日数回発生）は当分続く可能性がある。
　また、今回の地震活動域の周辺では、過去にも活発な地震活動が数か月継続したことがあった。例えば、2021 年の活動では、４月から数か月活動が継続し一度低下した後に、さらに数か月経って再度 12 月に活発になった。
－　７月にトカラ列島近海（諏訪之瀬島付近）で地震活動が活発となり、８月末までに震度１以上を観測した地震が 67 回（８月中は 34 回、最大震度３：３回）発生した。最大規模の地震は 27 日 23 時 11 分に発生した M3.4 の地震（最大震度３）である。これらの地震は陸のプレート内で発生した。

（６）南海トラフ周辺
－「南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていない。」：
　（なお、これは、９月５日に開催された定例の南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会における見解（参考参照）と同様である。）

（参考） 南海トラフ地震関連解説情報について－最近の南海トラフ周辺の地殻活動－（令和７年９月５日気象庁地震火山部）
「現在のところ、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時（注）と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。

（注）南海トラフ沿いの大規模地震（Ｍ８からＭ９クラス）は、「平常時」においても今後３０年以内に発生する確率が８０％程度であり、昭和東南海地震・昭和南海地震の発生から約８０年が経過していることから切迫性の高い状態です。

１．地震の観測状況
（顕著な地震活動に関係する現象）
　８月１７日０６時１３分に日向灘の深さ２９ｋｍを震源とする Ｍ５．７の地震が発生しました。この地震は、発震機構が西北西－東南東方向に張力軸を持つ型で、フィリピン海プレート内部で発生しました。

（ゆっくりすべりに関係する現象）
　プレート境界付近を震源とする深部低周波地震（微動）のうち、主なものは以下のとおりです。
（１）紀伊半島中部：８月２８日から８月３１日

２．地殻変動の観測状況
（顕著な地震活動に関係する現象）
　ＧＮＳＳ観測によると、２０２４年８月８日の日向灘の地震の発生後、宮崎県南部を中心にゆっくりとした東向きの変動が観測されています。また、２０２５年１月１３日の日向灘の地震に伴い宮崎県南部を中心に地殻変動が観測され、それ以降にもゆっくりとした東向きの変動が観測されています。

（ゆっくりすべりに関係する現象）
　上記（１）の深部低周波地震（微動）とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひず

み計でわずかな地殻変動を観測しました。

ＧＮＳＳ観測によると、２０１９年春頃から四国中部で観測されている、それまでの傾向とは異なる地殻変動は、最近は停滞しているように見えます。また、２０２０年初頭から紀伊半島南部で観測されている、それまでの傾向とは異なる地殻変動は、２０２４年秋頃から停滞していましたが、２０２５年初頭から再び地殻変動が観測されています。さらに、２０２２年初頭から、静岡県西部から愛知県東部にかけて、それまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されています。

（長期的な地殻変動）

ＧＮＳＳ観測等によると、御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺では長期的な沈降傾向が継続しています。

３．地殻活動の評価

（顕著な地震活動に関係する現象）

８月１７日に発生した日向灘の地震は、フィリピン海プレート内部で発生した地震で、その規模から南海トラフ沿いのプレート間の固着状態の特段の変化を示すものではないと考えられます。

ＧＮＳＳ観測による、２０２４年８月８日と２０２５年１月１３日の日向灘の地震発生後のゆっくりとした変動は、これらの地震に伴う余効変動と考えられます。余効変動自体はＭ７程度以上の地震が発生すると観測されるもので、今回の余効変動は、そのような地震後に観測される通常の余効変動の範囲内と考えられます。

（ゆっくりすべりに関係する現象）

上記（１）の深部低周波地震（微動）と地殻変動は、想定震源域のプレート境界深部において発生した短期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。

２０１９年春頃からの四国中部の地殻変動、２０２０年初頭からの紀伊半島南部の地殻変動及び２０２２年初頭からの静岡県西部から愛知県東部にかけての地殻変動は、それぞれ四国中部周辺、紀伊半島南部周辺及び渥美半島周辺から浜名湖周辺にかけてのプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。このうち、四国中部周辺の長期的ゆっくりすべりは、最近は停滞しています。また、紀伊半島南部周辺の長期的ゆっくりすべりは、２０２４年秋頃から一時的に停滞していましたが、２０２５年初頭から再びゆっくりすべりが見られています。渥美半島周辺から浜名湖周辺にかけての長期的ゆっくりすべりは、すべりの中心が渥美半島周辺から浜名湖周辺に移動しています。

これらの深部低周波地震（微動）、短期的ゆっくりすべり、及び四国中部周辺、渥美半島周辺から浜名湖周辺にかけての長期的ゆっくりすべりは、それぞれ、従来からも繰り返し観測されてきた現象です。また、紀伊半島南部周辺での長期的ゆっくりすべりは、南海トラフ周辺の他の場所で観測される長期的ゆっくりすべりと同様の現象と考えられます。

（長期的な地殻変動）

御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺で見られる長期的な沈降傾向はフィリピン海プレートの沈み込みに伴うもので、その傾向に大きな変化はありません。

上記観測結果を総合的に判断すると、南海トラフ地震の想定震源域ではプレート境界の固着状況に特段の変化を示すようなデータは得られておらず、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。」

参考１	「地震活動の評価」において掲載する地震活動の目安 ①M6.0 以上または最大震度が４以上のもの。②内陸 M4.5 以上かつ最大震度が３以上のもの。 ③海域 M5.0 以上かつ最大震度が３以上のもの。
参考２	「地震活動の評価についての補足説明」の記述の目安

1	「地震活動の評価」に記述された地震活動に係わる参考事項。
2	「主な地震活動」として記述された地震活動（一年程度以内）に関連する活動。
3	評価作業をしたものの、活動が顕著でなく、かつ、通常の活動の範囲内であることから、「地震活動の評価」に記述しなかった活動の状況。
4	一連でM6.0以上が推定されたゆっくりすべりとそれに伴って発生した低周波地震(微動)。